

# 第 1 回伊方町総合教育会議議事録

- 【日 時】 令和 6 年 10 月 23 日 15 : 30 ~ 17 : 00
- 【場 所】 伊方町役場 3 階 会議室
- 【次 第】 1. 開会 . . . . .  
2. 町長あいさつ  
3. 教育長あいさつ  
4. 議事  
    (1) 伊方町教育振興に関する大綱について  
    (2) その他  
5. 閉会
- 【構成員】 伊方町長 高門清彦  
伊方町教育委員会  
    教育長 中井雄治  
    教育長職務代理者 藤川美喜  
    教育委員 道元 平  
    教育委員 西村美重  
    教育委員 玉里英一
- 【事務局】 町長部局  
濱松副町長、谷村総合政策課長、他担当職員 3 名  
教育委員会事務局  
阿部事務局長、他担当職員 1 名
- 【傍聴者】 なし

## 1. 開会

(谷村総合政策課長)

只今から、令和6年度第1回伊方町総合教育会議を開催いたします。  
開会に当たりまして、高門町長からごあいさつを申し上げます。

## 2. 町長あいさつ

(高門町長)

日頃、町行政の推進につきまして格別のご協力を賜り誠にありがとうございます。  
伊方町においては、人口減少という重要な課題に向けて様々な施策を展開しているところですが、教育行政においては、学校再編という大きな取り組みを進めているところですが、また、再編にともない使われなくなる校舎の利活用についても真剣に取り組んで行く必要がございます。  
そういった点も踏まえ、教育委員の皆様方には本日は、ぜひ胸襟を開いて意見交換をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお祈りを申し上げます。開会のご挨拶に代えさせていただきます。  
どうぞよろしくお願いいたします。

## 2. 教育長あいさつ

(谷村総合政策課長)

ありがとうございました。  
続きまして、中井教育長からごあいさつ申し上げます。

(中井教育長)

改めまして皆さんこんにちは。  
高門町長様始め、町長部局の皆様には、総合教育会議を設定していただき、ありがとうございます。また日頃より伊方町の教育行政に多大なるご理解、ご支援をいただき、心より感謝申し上げます。  
ご承知のように、伊方町の教育行政は、大きな変革の時期を迎えており、課題も山積しております。人口減少や少子化による児童生徒数の減少に伴い策定された学校再編計画も、現在、九町小学校の学校統合が動き出しております。  
また、部活動の地域移行につきましては、国の方針もあり喫緊の課題となっております。  
児童生徒のいじめ問題は、現在、町内で深刻なケースは発生しておりませんが、不登校については、全国的に件数が増加傾向にあり、伊方町においても同様の状況であります。  
生涯学習においても、コロナ禍以降に衰退してしまった、町の伝統文化、伝統芸能等の活性化や、町民グラウンドの整備等といった課題があります。  
この総合教育会議につきましては、町長と教育委員会が意思の疎通を図り、町民の皆様の声を反映して伊方町の教育の課題やあるべき姿を共有すること。そして、課題解決のための方向性を見いだすことを目的としております。これまでもこの会議により、様々な重要な教育問題の改善に繋げてきた実績があり、伊方町の教育にとって大変重要な会であります。  
協議を深め、町長のお考えと、伊方町教育委員会の方針を調整して、教育行政に反映し、子どもたちの教育や町民の皆様々の生涯学習についてよりよい方向を目指し

ていければと思います。

町長から、皆様には自由に忌憚のない意見をということですので、様々なご意見を出していただけたらと思います。

よろしく願いいたします。

(谷村総合政策課長)

ありがとうございました。

当会議の進行につきましては、私、総合政策課長の谷村が務めさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

#### 4. 議題

##### (1) 伊方町教育振興に関する大綱について

(谷村総合政策課長)

まず、議題(1)の伊方町教育振興に関する大綱について教育委員会事務局からご説明お願いいたします。

(阿部教育委員会事務局長)

伊方町教育振興に関する大綱についてご説明させていただきます。

お手元の大綱の3ページに記載の4つの施策の方針に基づきまして、本年度または、昨年度から教育委員会が取り組んでいる施策等について、簡単にご説明させていただきます。

まず方針1の「学校教育の充実」に関しましては、昨年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行されたことに伴い、学校教育に関しても様々な活動が再開されております。長期間にわたり学校生活に大きな制限を強いられた子どもたちに、よりよい教育環境を提供できるようコロナ禍以前の活動を再開するとともに、新たな大小の取り組みを現在行っているところでございます。

それから、現在伊方町では人口減少対策を最優先事項として様々な施策に取り組んでおりますが、子育て支援の強化、教育環境の充実も重要な施策として位置付けられており、昨年度より給食費の半額補助が開始されました。

また、その他にも修学旅行等の学校行事への補助の拡充、英語検定受験料補助の拡充等、他市町より秀でた伊方町特有の教育支援事業を実施しております。情報教育につきましては、国のGIGAスクール構想に先駆けて、いち早く導入された全小中学校の1人1台端末を活用した事業が展開されており、学校同士をオンラインで結んだ合同授業等も実施されております。また、小学生のプログラミング学習の講師も確保し、プログラミング授業にも着手しております。

それから、昨年度から不登校支援教室の開設、本年度からは通級指導教室の開設等、配慮が必要な児童・生徒への対応や個性を重視した教育等の体制も整えております。

町内小中学校の再編につきましては、昨年11月に伊方町学校再編計画(第二次)が策定され、現在の伊方町に合った教育環境を整えるため、計画推進の準備に順次着手している段階でございます。

次に方針2の「生涯学習、生涯スポーツの活性化」に関しましては、地域と学校との連携を深めるために、学校支援コーディネーターを地域ごとに1名ずつ配置し、各種事業を令和3年度から展開しております。現在も事業を模索しながら進めてい

るところでございます。

また、一昨年度からは、伊方町出身の著名な俳人、坪内稔典先生に最終選者としてご協力いただき、佐田岬トーク事業を開始しており、その他、坪内稔典先生の吟行や講演会等を開催して、好評を得ているところでございます。

スポーツの分野におきましては、3年間延期されていた佐田岬マラソン第10回記念大会が、昨年11月12日に開催され、756名の方にご参加いただきました。今年度も11月10日に開催の予定でございますが、エントリー数は現在のところ978名と、昨年度を大きく上回る参加者となる見込みでございます。

次に方針3の「伝統文化の継承と発展」に関しましては、佐田岬半島の伝統文化と文化財を守りその魅力を発信する施設、伊方町文化交流施設佐田岬半島ミュージアムがこの8月にオープン1周年を迎えております。開館後の状況といたしましては、本年2月に開館から半年あまりで入館者1万人、本年6月には道の駅への来訪者が10万人を達成し、順調なスタートを切っております。

また、各文化祭につきましては、コロナ禍で何年も中止になっていたものが昨年度から再開されました。人口減少に伴いまして、各団体の演目は減少傾向にありますが、瀬戸地域・三崎地域は、中学校の文化祭と合同で行う等の工夫を凝らしながら、本年度は4公民館とも実施の予定で準備が進められております。

最後に方針4の「信頼と共同でつくる全員参加のまちづくり」に関しましては、各地区が開催を自粛しておりました地区別人権同和教育懇談会につきまして、開催を呼びかけ、形を変えて地区の総会と抱き合わせの開催等、これまでと違った形での実施の提案を行い、本年度は順次開催されているところです。ただし、まだ再開に踏み切れない地区も見られることから、今後も実施を呼びかけて参ります。

人権フェスタ2024につきましては、12月8日に今年度も開催の予定で準備を進めております。

昨年度から、国際交流の各種事業が再開されておりますが、レッドウィング市との交流事業及び、高校生の海外派遣留学等の事業を、本年も実施することができました。今週金曜日に参加者による報告会が開催される予定となっております。また、グローバル社会に活躍できる人材の育成ということで、英語力の向上を目指しておりますが、小学生向けの英語教室も開催しております。

説明は以上でございます。

(谷村総合政策課長)

ただいま、教育委員会事務局から伊方町教育振興に関する大綱について、施策の方針等の説明がございました。この大綱に基づいて、いかに本町の教育の充実を図っていくかなどについて意見交換を行いたいと思います。なお、ここからは自由な意見交換の形で進めたいと思います。どなたからでも結構でございますので、ご意見、ご提言、ご要望等ございましたらご発言をお願いいたします。

(西村教育委員)

我が子が今年小学校1年生になりました。去年、保育所を卒所したのですが、その時に自分の鉛筆と消しゴム、そしてプリントを持って帰り、そこに自分の名前をひらがなですが自分で書いてありまして、勉強というより遊びながらだとは思いますが、保育所なのにと、びっくりしました。本来は親が教えないといけないことかもしれませんが、ありがたいことだと思いました。

そこで、去年も認定子ども園のお話が出て、その時には検討会をやっていると聞いたのですが、その後の認定子ども園の検討経過について教えていただければと思います。

(濱松副町長)

保育所の統廃合の計画検討の中で、認定こども園についても検討しました。大洲や八幡浜の事例を調査して、保育所型で取り組めないか検討をしているところです。具体的に導入云々の話までにはなっておりませんが、随時、先進地の視察等を行いそのメリット等を整理して、今後検討していく事になっています。

(西村教育委員)

私の家から毎朝、八幡浜市の幼稚園の送迎バスが停まっているのが見えます。もし伊方に認定こども園があれば、八幡浜市に通っているお子さんも伊方に来てくれる可能性がありますし、そこからまた親同士の繋がり、子ども同士の繋がりができる事も考えられますので、ぜひ、認定こども園は前向きに検討していただければと思います。

(濱松副町長)

おっしゃるとおり八幡浜市のこども園に通う光景は見られます。子育て支援を充実させていくためには、認定こども園というものは必要だと思っていますので、どこまで具体化できるか分かりませんが、担当の保健福祉課に伝えておきます。

(西村教育委員)

次に、伊方町図書館のことです。うちの子どもは図書館が好きでよく通っていますが、利用者が少なくて、大体決まった方しか来られていないように見受けられます。また、コロナ禍のときの「この椅子は使ってははいけません」「席を空けてください」の紙が、今もまだ席に置かれているようです。電子図書の方は利用者が多いと聞きましたので、本が好きな方も多くいると思われれます。ただ、せっかく立派な図書館があるので、町内外の大勢の方に図書館に足を運んでいただきたいと考えたときに、図書館の室内は明るいのですが、そこまでの階段が少し暗く感じます。それから利用者が少ないのでそれほど目立たないようですが、本を読むスペースが少ないように思います。静かに読むのがやはり図書館のマナーだとは思いますが、少しは「この本がいいね」とか「面白いね」と色々話をしながら本に親しんでいただきたいと思います。1つの案として、生涯学習センターの3階の児遊館の中に学童をしていた部屋がありますが、そこに図書館の本を持ち込めて自由に談笑しながら読めるというようにして、「図書館は楽しい」という感覚や親近感を持ってもらい、伊方町の図書館が気軽に行ける場所になればいいと思います。図書館の職員の方もいろいろイベントを企画されているのですが、手応えがなくて落ち込んでいるとお聞きしましたので、みんなでもちろん伊方町の職員の方も昼休み等に利用してもらって、活気ある図書館にしていいただきたいと思います。

(高門町長)

私もそう思います。

(山本中央公民館長)

今、人事評価の時期なので昨日、職員と面談したところなのですが、利用者が減っているのでは何かしたいという思いは、みんな強く持っていました。

様々な意見があると思いますが、図書館の職員もよく考えて色々やろうとしております。先ほど西村委員が言われたようなスペースを作るという事については、子どもや学生が来る機会を増やしたいと思っておりますので、自習スペースの様なものを確保して、そこに来て自習しつつ図書館で調べたい事が出来れば図書館に行くという動線ができればという事を、昨日ちょうど話したところです。まだ具体的には進めていませんが、今後考えていきたいと思っております。

(西村教育委員)

伊方町図書館には新しい図書がよく入っていますが、今の時代なのでインスタなどのSNSを活用してお知らせして、フォローしていただいた方には、しおりをプレゼントという様な事も考えていただけませんか。

(山本中央公民館長)

職員とはその話もしたのですが、図書館の職員にSNSを使いこなせる者がいない様でして、その辺りを少し勉強する様、指示したところです。

(中井教育長)

以前から、生涯学習センターは飲食禁止となっておりますが、これではセンター内でくつろげるような場所がありません。当初、飲食は隣の中央公民館でという考え方だったのでありますが、それでは駄目だと思っております。先ほど西村委員が言われたように、3階の学童のスペースを、会話も可能、飲み物や軽食も可能というスペースにする事を検討する様、以前から指示はしております。これは町長からも指示されている事です。

(高門町長)

そもそも図書館が2階にあるのはいかがかと思うのですが、既に2階にあるのだから仕方ありません。

(西村教育委員)

図書館が2階にあるとやはり入りづらいと思いますので、例えば新刊図書や話題の図書を何冊か、1階のスペースに展示する事はできないでしょうか。

(山本中央公民館長)

新刊は毎月役場の1階のロビーの紹介コーナーで紹介しています。

(高門町長)

移動図書館についても、構想中と以前から聞いているのですが、まだ具体化していません。

(中井教育長)

移動図書館までは行っていませんが、リクエストがあれば支所で受け取れるとい

う、リクエスト図書館はやっております。

(山本中央公民館長)

最近、三崎の方でリクエストがあつての貸し出しが増えていると聞いております。

(中井教育長)

学校にもまとめて貸し出す等の取り組みもしています。

(西村教育委員)

三崎の人から、伊方まで来るのは小旅行だと言われたので、リクエストだけでなく、こういう本がありますとお見せできる移動図書館はとてもいいと思います。

(高門町長)

移動図書館は諸々難しいという事から電子図書館も導入しましたが、電子図書館はだいぶ充実はしたのでしょうか。

(山本中央公民館長)

はい。貸し出しも結構増えたので、実際に図書館に来る人が減ってしまったという状況もあるようです。

(中井教育長)

電子図書館の本の冊数は1万冊です。利用も学校を中心にかなりあるという事ですので、一定の成果は収めていると思います。

(高門町長)

この件はご指摘をいただいたので、なお一層研究しましょう。

(道元教育委員)

私からは方針3の「伝統文化の継承と発展」について、少し質問させていただきます。先週の日曜日に伊方小学校のグラウンドで秋祭りがありましたが、その日はちょうど、家で埼玉県の高校生の民泊体験型の修学旅行を受け入れていました。良い機会と思いましたが、お祭りを見てもらいましたが大変喜んでもらいました。コロナ禍には各地区の盆踊りが全部中止になりましたが、一度止めてしまうとコロナが収まっても再開が難しいようです。神崎の神楽や大久のしゃんしゃん踊りは再開できていませんし、九町の八幡神社の秋祭りももう今年で終わりにしようという話が出ていました。すぐには難しいかもしれませんが、伝統文化保存会みたいな形で祭り好きな人材を募集して、閉校になった学校施設を利用して、色々なお祭りがここに来たら一年中見られるという場所ができないでしょうか。観光にもインバウンドにも活用できると思います。八幡浜の神楽などは保存会を持っている様なので、伊方でもそういう事ができないかと思っているのですが。町長はどう思われますか。

(高門町長)

地区によって祭りの形態が結構違うと思いますが、川永田地区には五つ鹿の伝統

保存会があります。五つ鹿にしても各地区で踊りが違いますので、町として取り組むには、そういうところで公平性はどうかと思います。

(道元教育委員)

祭りをしなくなったら各地区に道具が残ります。加周地区はここ10年以上全く使っていませんが、今の段階だったらまだ指導者がいて継承できると思います。三崎高校の伝統芸能の部活みたいな感じではないですけど。

(阿部事務局長)

祭りの練りの形だけを芸能として残すという事と、その祭りを残していくという事は違うという気がします。お祭りには地元の熱意が必要不可欠かと思います。

(道元教育委員)

地域ごとの特色などはそのまま残すとして、それを継承していく団体や保存会のようなものはできないでしょうか。どこかの祭りで人が足りなければ助人に行けるという事もできると思います。神崎の神楽はもう維持できない状態ですが、伊方町に1つしかないこの神楽は保存していく価値があると思います。

(高門町長)

それを町民がどう思うかですね。

(玉里教育委員)

私が住んでいる三崎地区はつい先日、秋祭りが終わったところです。三崎の秋祭りはコロナ禍で長年、中止されていましたが、昨年やっと復活できて今年は2年目になります。私は現役の青年団ではありませんが、OBとして毎年、準備段階から参加させてもらいます。今年の祭りですが三崎高校の生徒がかなり応援体制で入ってくれていました。三崎では宵祭の夜中から、唐獅子、相撲甚句、五つ鹿が各家を回りますが、その中でも高校生が混ざっていました。私が一番驚いたのは、当日の本番の練りのときに、女子高校生が江戸原パッチという三崎青年団の独特な祭り衣装を着ていた事です。青年団は江戸原という前掛けと唐草模様のパッチを履いて、唐獅子を回すのですが、女子高校生がその格好で練りに参加していたのです。もちろん当日の鉢合わせの危険な場面には参加はさせませんが、その衣装を着て前日からずっと同行していたかと思うと少し驚きました。長年、三崎に住んでいますが、女性青年団員でも、その衣装を着て唐獅子を回すような光景は見たことがありません。町外から来ている子だと思えるのですが、本人から希望したのか、或いは青年団から依頼したのかは定かではありませんが、恐らく本人がやると言ってくれたのだらうと思います。私も三崎高校のOBですが、今、三崎高校には他所から来て入学した子が増え、その子たちが地域の特別な行事に参加をしてくれる。祭り前には、高台の高校から私の家まで、太鼓の練習をする音が聞こえてきます。唐獅子の太鼓のリズムが聞こえると、すごく嬉しくなりました。三崎高校がそういった形で地域との交流に取り組んでくれたおかげで、他所から来た高校生たちに、三崎地域の伝統芸能である祭りを、実際に経験していただいたのです。地域の住民は祭りに参加する高校生の姿を見て、すごくありがたいと思ったのではないのでしょうか。地元の祭りの参加者が減る中、そういった形で三崎の祭りを盛り上げれば、繋いでいけ

るのではないかと、今年の祭りに参加して強く実感しました。青年団の若い子たちともそういう話をしたのですが、三崎高校にはそういった取り組みをぜひ継続していただいて、地域に根差した高校であって欲しいと強く思います。

(高門町長)

今年の三崎の祭りのことは私も聞きましたが、三崎高校はそういった意味で地域に溶け込んでいて、よくやってくれていると思います。瀬戸、伊方地区にも呼んでくれればありがたいのですが、まだそこまではいかないようです。そういった中で保存会的なものを考えるとしたら、ミュージアムの中での活動かと思います。

(道元教育委員)

ミュージアムの活動ですが、今年3年目になる学芸員資格を持っている地域おこし協力隊員は、本当によくやっています。協力隊員の任期後も伊方町に残ってほしいのですが、まだわかりません。ミュージアムの運営に関しては人材が不足しているのではないかと思います。最近、土日祭日にミュージアムガイドが入っているのですが、やはり職員が少ないと思います。来館者が多い土日祭日だけのパートタイムでもいいので、ミュージアムで働ける人材を確保できないかと思います。

(高門町長)

今、ミュージアムは何人体制ですか。

(阿部事務局長)

協力隊を除いて4名です。

(高門町長)

伊方町役場全体の人員が減っているところですが、ミュージアムの人員は増やしていますよね。

(道元教育委員)

私はガイドもしているのですが、最近、団体に来るたびにガイドの要請が来ます。ただ、そういう団体は学芸員しか対応ができません。

協力隊員が任期を終えても、そのまま伊方町に住んでもらえるような仕事等を探していくべきだと思います。

(高門町長)

そもそも地域おこし協力隊はそれが目的なのですが、伊方町ではなかなか生活していけないという事で、あまり成果が出ていません。

(道元教育委員)

来る人が漠然としすぎていると思います。それなりにそれぞれの目標を持って、来られていますけど、果たしてそれを協力隊の期間が終わった後も継続してやっていけるのかというと、なかなかそこが難しいようです。

(高門町長)

協力隊員の定着率は今どのくらいですか。

(濱松副町長)

半分くらいです。

(高門町長)

同じ協力隊員である公営塾の講師は、任期が終われば塾を開く等しかないので、やはり離れていきますよね。その辺の定着率への影響が大きいと思います。

(濱松副町長)

現在、事業提案型の協力隊として募集している内容が、キッチンカープロジェクトの事業主です。キッチンカーの事業を町内でやってみて、できれば2、3年後には事業として定着するような考えで来る方を募集しています。ただ、まずは地域で受け入れるという体制を整えなければならないと思います。協力隊員が20数名入っている県内ナンバーワンの西予市では、地区の人がうちに来てくれと手を挙げ、地区でその隊員の世話をして定着させる、という仕組みができていますので、それだけの協力隊が来ます。担当課にはそういった事例も調査して、コミュニティづくりという観点から、協力隊を入れられないかという検討をさせている状況です。

(中井教育長)

道元教育委員が言われた学芸員の確保については、教育委員会としても手は打っておりますし、土日の補完ということについても手当をしております。そういう困り感というものは把握しており、その必要性も十分考えておりますので、その手当を今後もやっていきます。

(藤川教育長職務代理者)

先ほども出ましたが、学校再編後の閉校になった校舎の活用方法について、町は何か考えてもう動いているのかということが1点と、防災の面から、各学校の校舎や体育館のLED化の現況と今後の予定についての考えをお聞かせください。

(高門町長)

再編後の校舎活用は現在よい知恵がありません。冒頭でも言いましたように、逆に皆さん方から提案してもらいたいと思っています。どうすればよいのか本当に困っています。

また、現在、町内に人材が足りません。水ヶ浦小学校に誘致したコールセンターに8名、三崎支所内に誘致したIT企業に5名雇用されましたが、当初の予定では40名近く採用したいという事でした。ところがスタッフを募集しても応募がないらしく、闇雲に企業を誘致しても難しいという事です。

閉校すれば校舎が空きますが、どうすればいいのか本当に悩ましいところです。

(藤川教育長職務代理者)

地区の方、特に瀬戸地区から施設がどんどん無くなっていくのは、本当に寂しいとよく聞きます。企業的な誘致も大切ですが、学びが確保できるような施設にできないでしょうか。

(高門町長)

そういう施設は地区の人に活用してもらえますでしょうか。

(藤川教育長職務代理人)

学びの施設も大事なのですが、防災施設としてここがあれば安心というような施設を1つ確保できたらと思います。その点で瀬戸中のポテンシャルは高いと思います。今の再編計画でいくと、三崎と伊方に子どもたちが集まる事になりますが、災害時に、学びが保障される拠点が1つ確保できていれば心強いです。

今後、どんな災害が起こるか分からないので、校舎が使えなくなっても代替えに使える施設が1つあれば安心ですし、そしてそれは避難所等として防災の面でも安心できるのではないかと思います。

(高門町長)

災害対策も含めてですが、当面は小学校の再編なので、伊方小と三崎の小中体育館のLED化と空調をどうするかというところと、それから町見、瀬戸、三崎の総合体育館の空調整備、LED化を行うということを考えています。中学校はどうなるか分かりませんが、工事費の概算について今、見積もりをしているところです。

(藤川教育長職務代理人)

予算をどのように配分するか色々考えはあると思いますが、それらは漏れなく予算化していただきたいと思います。

(高門町長)

町の総予算は100億ですが、その中で諸々含めて使える予算というのは本当に数億程度です。それをどこにいくら使うかを考えた際に、農業者からはジュースの加工施設を作りたい、漁業者は三崎の漁協を何とかひとり立ちするように等、それぞれ思いがあります。その中で学校施設の何をどういう順番でやっていくかという事は、十分検討させてください。

(藤川教育長職務代理人)

はい。それでは次にですが、専科充実について去年も言わせていただきましたが、学校の先生は本当に忙し過ぎると思います。今、新採2年目の先生が複式を持っているという学校が結構あります。複式の授業は非常に負担がかかりますが、それぞれの先生が工夫して頑張っておられる姿を見て、指導面では安心しております。ただ、専科の先生が1人入ると、その負担も変わってくると思いますので、英語と理科系の先生を含めて専科充実を進めていただきたいと思います。

(中井教育長)

人員の確保は県の仕事になりますが予算が厳しい事もあり、なかなか配置していただけません。ただ伊方町としては教育活動指導員をそれぞれの小学校に1名配置しています。三机小学校は2年目の先生が複式を持っていますが、ここにはスクールサポートスタッフが入っています。その上に教育活動指導員を入れるよう予算は確保しているのですが、残念ながら適切な人員の確保ができませんでした。そうい

う事情で現在、十分な手当ができていないのですが、今後、そういった支援の必要な全ての小学校に対して人員を配置できるようにしていきます。また、現在、複式がない伊方小学校にも教育活動指導員を入れておりますので、先生方のサポートをしてくれる人材を確保し、忙し過ぎという状況を緩和することは心がけているつもりです。ただ、人材の確保が困難という状況はご承知おきください。

また九町小学校は、来年、再編に向けての事業があり、大変になります。そういうところには、教育委員会としても人員を1名増員というようなサポートも必要ではないかと思い、県に要望しております。県ができなければ町の費用でという事も考えております。

(藤川教育長職務代理者)

県費をあてにしていると、なかなか手厚いサポートをしにくいと思うので、先ほどの町長の言葉通り、箱物の予算は直ぐにはつけにくいと思いますが、マンパワーを補完する事をまずはしていただきたいと思っております。マンパワーで言うと部活動の地域移行についても、外部指導員の確保が大変だと思っております。今、町内で自分がしたいスポーツ・文化活動が見つからないので、町外に出る人が増えてきていると聞きますので、スポーツ面でも文化面でもエキスパートの指導により、子どもたちの力を伸ばすよう、町で外部指導員を雇い入れる考えがあるかをこの場で確認させていただきます。

(中井教育長)

部活動の地域移行につきましては、現在、文部科学省の補助をいただいて、地域移行に向かっての人員確保にかかる費用や会議の費用、資格取得の補助等という事を行っているところです。その事務や調整を行うためのコーディネーターも雇用しております。部活動の外部指導員、外部講師は音楽と卓球男子のために現在2名雇用しておりますが、今後も、卓球やバレーというところを補完していこうとしております。ただ、財政的な手当ではできているのですが、部活動の指導員ということになると、時間的に4時から勤務できる人材を探す事は、なかなか難しい状況です。ただ、藤川委員の言うマンパワーの確保には、今、全力を挙げてやっております。

それから、総合型のクラブというものの立ち上げも想定をしております。ただ、少ない人数でどうやってスポーツの多様化を図るのか、クラブスポーツの多様性を出すのかというところはなかなか難しいのですが、2期制、シーズン制にする等の工夫をしつつやっっていこうと思っております。これも委員の皆さん方と相談しながら進めていきたいと思っております。

(玉里教育委員)

私の方からは、方針2の「生涯学習、生涯スポーツの活性化」についてですが、大綱には中心となるリーダーの育成と書かれてあります。私は前職で色々な各種団体の事務局をしていましたが、その際にはリーダーになる人を育成する事が一番のネックでしたので、どのように育成しようとしているかお聞かせください。私が携わった一番大きな団体は老人クラブでした。各種団体というと日赤奉仕団や障害者協会、遺族会、それ以外にボランティア団体等、色々な団体があります。

一番困ったのが、リーダーの次の担い手をどう見つけるかということでした。見つからないと次に繋がっていきません。ご存じのように人口はどんどん減っていく

中で、リーダーを見つけられても、色々な事業を展開していけば、人員の確保もしていかなければいけません。研修事業をすれば、それをどう生かしていこうか、次の活動にどうやって繋げていくかを考えるリーダーの役割はすごく重要です。他の分野でも一緒だと思います。企業でも一緒ですし農業関係、医療関係、色々なところで必ずリーダーはいると思います。ですので、このリーダーを育成するというのが一番大事なのですが、町もおそらく苦勞されていると思います。リーダーを育成するために私が1つの方法としたのは、個としてお願いするのではなくて、グループ化していく事です。各種団体には各地区に会員さんが必ずいます。その地区の中の小さいところで、まずグループ化をしていきました。その小グループの中で、誰がリーダーとしてお願いできるかというところから始まって、そこから大きいところへ持っていくという考え方で、まずは小さいグループを作り、そこから全体のリーダーになっていただくという方法をとっていきました。最初から全体のリーダーになってくださいと言えば10人中10人に断られます。例えば老人クラブの会長になってください、奉仕団の委員長さんになってくださいではなくて、今現在事業を展開している中で、次につなげるためのグループを作っていくながら、次の方を事務局がバックアップしながらやっていくようにしました。そこで横の繋がりを作っていたらそのグループの中から、次の役員を何人か出してもらったり、グループの中で継続してやっている間に、事業のことを詳しく理解をしていただいた上で展開していくという形を私はとっていました。リーダー育成と書いていますけど、相当大変な作業だと思いますし、様々な事業を展開していく中で人員の確保という事は本当に苦勞されていると思います。私の経験上でも、そこが一番大変なところだと思いますし、事業を継続する上で一番大事なことだと思います。

(山本中央公民館長)

社会教育の分野になりますが、公民館の取り組みで中央公民館平成大学という高齢者向けの講座を開いております。今年度初めに委員長を決める際に、通例で各地区から順番に出すことになっていたのですが、大変揉めました。皆さんのお話しをよく聞いてみると、老人クラブも入っていて、この勉強会も入っていて、色々忙しいという事です。全国的に今、年金開始年齢も引き上げになり、働いている人も多いようです。昔でいう60歳から第2の人生という考え方がなくなってきているという分析をしている市町があるのですが、高齢者向けのリーダー育成というのは非常に難しく、私も苦勞しているところです。最後は何とかもう知り合いに頼んで会長を引き受けてもらったという形になりました。これは婦人会とかもそうだと思います。働く女性が増えてきて婦人会もどんどん解散してきていますので、現在、リーダーの方を見つけ出すのが難しくなっています。先ほど玉里教育委員がおっしゃられたように、人との繋がり、これはという人に直接お願いして、何とか引き受けていただいているという状況が現在のところです。最近、中高生や若い年代の人達に、地域と関わりを持ってもらい、将来的に中心となってもらおうという教育に力を入れている公民館も増えているようです。当館でもそういった取り組みを増やしていきながら、現在の事業は事業で継続するため、何とか引き受けてもらえるようお願いしているというのが現状になっております。

(玉里教育委員)

一番大事なのは今継続できているときに、2年後、3年後を考えて動いていく事

です。いざとなったときに打つ手がないと大変だと思うので、今の段階から2年後3年後を見据えて動いてください。

(阿部事務局長)

リーダー育成で、現行の制度的なところから申し上げますと、伊方町人材育成事業費補助金というものがあります。ここ数年、三崎高校の生徒しか交付実績がありませんが、人材育成のための活動に対する補助金として、町の方で予算を用意しております。そして今年度からスポーツ関係の資格取得のための受講費や旅費を補助する制度を設けました。人権関係に関しましては、教育委員もよくご存じだと思いますが、人権・同和教育推進員研修会を毎年3会場で行っております。

(中井教育長)

自主的なリーダーを育てるという意味で、今、公民館では自治公民館活動というものを行っています。この自治公民館は公民館主事がリーダーになって地域での行事を行うというもので、地域のリーダーを育てるという意味では、一番理想的なものだと思います。コロナ禍で中止されていましたが、昨年から徐々に活性化してきておりますし、リーダーを育てる、リーダーを支えるような仕組みが徐々にできてきていると思います。色々な組織の取り組みが活性化し、色々な会が面白いということになれば、次を担う人たちが出てくるのではないのでしょうか。現在、リーダーの育成という点では、教育委員会ではその様な事を行っているわけですが、ただ玉里委員がおっしゃるように青年団や婦人会がなくなり、老人会も加入者が少なくなっています。リーダー予備軍とも言える青年団の団長や婦人会の会長など、色々な集まりの中でリーダーを育成できる環境が減少しております。そういう時代だと言えればそれまでですが、やはり社会教育や生涯学習を推進するリーダーというものはしっかり育てていかなければなりません。困難な問題ではありますが、今後とも一生懸命取り組んでいきます。これは生涯学習だけでなく、町全体の色々な組織も同じだと思います。

(高門町長)

はっきりは分かりませんが、町がやってもらいたいことと、町民の皆さんがやりたいこととの間にギャップがあるのではないかという気がするので、その辺を少し整理する必要があると思います。青年団活動は嫌だけど、自分たちでボーリングに行く時には集まるという風に、町民の皆さんが本当にやりたいことを、町がバックアップするという風に考えてみたほうがいいのではないかと思います。最低限、社会奉仕活動としてやらなければならない部分は別として、その辺の方向転換を考えてみてもいいという時期に来ているのではないのでしょうか。若い人たちは今、消防団に入る事を嫌がります。嫌だからやめるという訳にはいかない部分はありますが、皆さんがどういうことをやりたいのかということ、それを町がどういう形でバックアップするかということも、併せて考えていくべきではないかと思います。

(道元教育委員)

去年から民泊体験型の修学旅行生の受け入れをしており、今年度も春と秋で10校の受け入れをしています。2泊3日と期間は短いのですが、どこに連れて行ってあげようかと色々考え、灯台を始め思いついた場所に連れて行きますと、生徒達は写

真を必ず撮っていました。そこで思いついた小さなことですが、灯台の御籠島のベンチや、大久の風車公園等のベンチに、サダンディーの動かない置物を置いたら写真を撮るときにいいかと思えます。

(藤川教育長職務代理者)

私も民泊の受け入れをしています。今の高校生の子たちは必ず写真を撮り、それぞれ自分の知り合いにどんどん発信していくので、こちらもおもてなしの限りを尽くしたいと思っています。そして方針4の「信頼と共同でつくる全員参加のまちづくり」にも繋がるのではないかと思うのですが、修学旅行を受け入れても私の家庭だけでできることには限りがあります。例えば稼業体験等を外注という形で農家の方に芋堀体験をお願いしたり、魚さばきを漁師さんのところをお願いしたりして、できるだけ伊方の魅力を、体で覚えて帰ってもらえればと思いました。お世話をすることは嫌じゃない人が多い気がします。頼みに行ったら最初は戸惑いながらも、すごく親切に教えてくれます。お年を召した方も若い方も、それぞれ自分の得意分野を高校生に伝えようという意識はあるので、そういう力をどんどん利用したいし、そういう意識を伸ばすような場をつくる機会を与えていただきたいというふうに感じます。

(道元教育委員)

ある講習でアドバイザーの方に聞いたのですが、修学旅行の場合、その学校に気に入ってもらえると、その先10年続くそうです。私は民宿をやっているのですが、普通、観光で来られても通り過ぎるだけで、伊方町内にはそんなに時間を使ってもらえません。それからすると、修学旅行生の受け入れは、町内を隅から隅まで案内するので、PRには一番役立つのではないかと思います。

(高門町長)

今年また受入が増えました。協力いただいた皆さんには受け入れしていただきありがとうございます。

(藤川教育長職務代理者)

現在、観光商工課が中心となって、プランを作ってくださいなのですが、それこそ教育的な見地から、先ほど言っていたリーダーではないですけど、そういうコーディネートできるような人材を作って育てていくというような取り組みをしていけたらと思います。学校では今、色々と地域と結びつけた教育をしています。それを町が外部に対するおもてなしとして、コーディネートできるような仕組みがあればいいのにと感じます。

(道元教育委員)

現在、体験型の部分では、伊方町で受け入れているメニューはトレイルしかなく、船釣りや磯釣り体験等は全部八幡浜市の受け持ちになっています。伊方町にも港があるし養殖場もあるので、色々な体験をどんどん受け入れていけたらいいのではないのでしょうか。

(高門町長)

現在、そういったメニューは受け入れていませんか？

(道元教育委員)

受け入れ先がありません。私の場合は地元が釣り禁止なので、隣の無人の浜辺に連れて行ってあげました。今回、秋に受け入れた高校は埼玉県で海がありません。春は京都の高校が多いのですが京都も海がありません。そういう生徒たちが、伊方町のような海を抱えている場所にくると、海が見られるだけでかなり感動してくれます。

(高門町長)

釣りに行って浜辺でご飯を炊いて食べたら美味しいですよ。

(道元教育委員)

先週やりました。流木を集めて石でかまどを作ってご飯を炊きました。

(西村教育委員)

そういう体験をもっとPRしたらいいと思います。本当に申し訳ないのですが、つい最近、伊方町のインスタがあることに気づいて初めて見てみたのですが、厳しく言わせてもらおうと面白味に欠けていると思います。

(高門町長)

よく言われます。

(西村教育委員)

職員募集があります、イベントがありますという告知ばかりなので、豊かな自然を活かして、こういうことをしていますという内容をアップすれば、興味を持っていただけるのかなと思います。

(高門町長)

私も思いますが、手一杯でそこまで出来ないようです。

(西村教育委員)

どこかの市では、ハッシュタグをつけたら、紹介してくれてありがとうございますとメッセージを送ったり、市のインスタへリンクしたりしています。

(阿部事務局長)

デジタル博物館は頑張っています。

(濱松副町長)

11月1日から地域おこし協力隊の情報発信という業種で募集した人が来ますが、その人はもともと写真を撮る仕事をしていて、そういう人の感性でSNSも含めて情報発信してもらいたいと思っています。町長がよく、伊方の海のは遊漁船だと言っています。遊漁船は伊方地区で3人、瀬戸で4人、三崎が一番多くて12人、計19の方が遊漁船を営んでおります。そういう体験も修学旅行に組み込んで

もらいたいのですが、修学旅行の場合は経費が決まっています、なかなか難しいようです。それから達人マップというものができたらいいと思っています。魚さばきの達人や、みかん狩りや芋掘りなどの達人をマークしているマップです。それを修学旅行のコンテンツとして活用できるよう、受け入れ家族の方もそういう取り組みができればいいのですが、なかなか簡単にはいかないところがあります。それから修学旅行の引率の先生とお話ししていたら、ここに県立高校があることに驚かれましたが、高校生の交流の様な事も出来ればという意見も聞きました。分宿している修学旅行生が町内のどこか1ヶ所に集まって体験メニューを行うという事も必要かと思えます。その辺りはまた今後いろいろ考えていかなければなりません。

(高門町長)

今後、閉校となる九町小などの校舎の活用方法は何かないでしょうか。

(道元教育委員)

カプセルホテルのような活用は、学校設備では難しいでしょうか。今は丸いタイプのカプセルではなく四角い縦長で区切ったようなカプセルがあります。男女別のフロアになっていて食堂等は共同スペースです。

(高門町長)

恐らく施設はできると思いますが、運営を誰がやるかが問題です。

(道元教育委員)

伊方町は宿泊施設や食事処が少ないので、人が来るようになれば商売を考える人はどんどん増えていくと思います。

(高門町長)

宿泊施設で言えば今、亀ヶ池温泉の宿泊施設で稼働率が6割ぐらいです。それから今度、瀬戸アグリトピアもリニューアルするのですが、すでに民業圧迫だとも言われています。この分野にどこまで行政が介入できるかですが、やはり民間にどんどん入ってもらいたいと思っています。

(道元教育委員)

現状で、宿泊施設や飲食店は、隣の八幡浜や保内に行けばあるので、他の部分でどんどん人が来てもらえる方法を考えていかなければなりません。人さえ流入してくれば、いろいろ商売を考える人も増えるでしょうから。

(高門町長)

それをどうするのかです。内子市と大洲市には流れてきています。そこから八幡浜市にはあまり来ません。韓国への飛行機が結構、便利になりましたが、やはり内子と大洲までのようで、ゴルフ場は大盛況らしいです。

(道元教育委員)

先月、しまなみ海道の生口島に行きましたが、あそこには平山郁夫美術館しかありません。それでもバスがそこに行ったら、近くのお土産屋のおじさんが美術館の

入口で待っていて、終わったらうちに来てくださいとみんな引き連れていきました。お昼は名物のたこ飯のお店に行きましたが、お店も数はそれほどないのですが、コースが作られていて、それで十分じゃないかと思いました。もう一つ行った島では、万田酵素の会社の工場見学をしました。お土産売り場や商店街などの散策する場所はありませんでしたが、どこか1ヶ所でもそういうものがあるだけで、大型バスは止まるのだと思いました。

(高門町長)

佐田岬ミュージアムにも大型バスが結構止まっていますね。

(道元教育委員)

そうですね、ミュージアムは最近増えました。

(高門町長)

何か買ってくれているのでしょうか？トイレに寄るだけでしょうか？

(道元教育委員)

物販の物が少ないので、そこがもう少しにぎやかになればよいと思います。

(阿部事務局長)

8月にミュージアムショップで、試験的にお菓子やお土産用の食品などを置いてみました。

(中井教育長)

お試しでやったのですがあまり効果がありませんでした。

(阿部事務局長)

ミュージアムショップの6～8月の売り上げは結構伸びています。

(中井教育長)

Tシャツやトートバッグ等を新たに増やしたので増えているのだと思います。

(道元教育委員)

三崎の選果場も物販ができればよいと思います。例えば夜昼トンネルを出て大洲に降りて行ったら左側の選果場で柑橘を売っています。八幡浜市も北浜に甘柑日和というお店があります。ああいう施設が選果場の一角にあれば、また違ってくると思います。

(高門町長)

柑橘の直売所を、うちのミュージアムのテナントに出店してもらおうよう交渉はしましたが、うまく行きませんでした。

九町小、三机小の活用方法について、よいアイデアがありましたら、また教えてください。

## (2) その他

(谷村総合政策課長)

続きまして、その他何かないでしょうか。

出尽くしたようですので、以上で議事を閉じさせていただきます。最後に濱松副町長から閉会のご挨拶をお願いいたします。

## 5. 閉会

(濱松副町長)

第1回の伊方町総合教育会議ということで、皆さん忌憚のないご意見を賜りまして、誠にありがとうございました。いただいた意見を参考にして、取り組めるものは取り組んでいくということで、やっていかなければならないと思っております。いずれにせよ、教育というものは非常に重要で、そしてまた、人に来てもらえる環境づくりというものもまた必要です。移住にしろ観光にしろ、そういったところを町としてもしっかりと取り組んでいきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いを申し上げまして、閉会の挨拶とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

(谷村課長)

以上で第1回伊方町総合教育会議を閉会いたします。大変お疲れ様でした。